
異世界忍者

rin1031

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界忍者

【Nコード】

N7919S

【作者名】

rin1031

【あらすじ】

古来、忍者は諜報活動や暗殺を生業にしてきた。かの有名な服部半蔵や猿飛佐助、風魔小太郎もそうだ。そして彼らを超え、平成の世に最強の忍者が誕生しようとしていた。彼の名は霧間^{きりま}刃^{じん}。そんな彼は高校2年の時、交通事故で死んだ。そして、異世界へ……。*注意…これは主人公最強小説です。そして作者は初心者であり、学が無いので読みにくいと感じるかもしれません。この小説は所詮、作者の自己満足小説なので、これらが嫌だと言う方は、戻る推奨です。

プロローグ

俺は霧間 刃^{きりま じん}。高校2年の17歳。黒髪黒目で身長はこの前の身体測定で2センチ伸びて181センチになった。

ただ、普通の高校生ではない。俺は伊賀流の忍者である。

俺は生まれたばかりで忍力^{にんりょく}が普通じゃなかったらしい。

忍力とは、某週刊雑誌に掲載されている某忍者漫画でいうところのチャクラであり、ゲームでRPG風に言えば魔力と同じだ。

これは代々忍の血筋の人間にしか備わらないものらしい。

俺の忍力がいくつぐらいかと言うと、今現在忍者最強と言われている俺の親父の忍力を軽く超えていたようだ。後の修行で聞いたことだが、親父の100人分らしい。

俺って本当に人間か？

そんな疑問が出ても可笑しくないだろう。

成長した俺は伊賀流忍術だけでなく、自己流忍術も編み出した。

そんな俺に嫉妬する奴らもいる。

伊賀流でも味方は俺に家族だけ。他の奴らは妬んでいるようだ。

他の流派の奴らは俺が強くなりすぎていつか滅ばされるんじゃないかと怯えている。

そんなことしないのに・・・。

つまりは俺は伊賀流のお荷物だということだな。

俺のことは一般人には内緒である。バレてしまえば俺の力を悪用しようとする馬鹿な奴らが後をたたないだろうからだ。それに、恐れられて避けられるのは辛い・・・。

今日は春休み明けの始業式。

「おはよう、刃」

「おう。おはよう」

こいつは幼馴染の文月みちる（ふみつき みちる）。俺と同じ高校に通う同級生だ。身長はだいたい俺の胸ぐらい。体重は・・・知らん。黒髪で腰まで伸ばしており、ポニーテールにしている。よく男子に呼び出されては告白されていた。ちなみに、みちるの家は剣道の道場としても有名で、去年の剣道の全国大会個人の部を1年生にして優勝してしまった。勉強も学年で5位には入る。なんというハイスペック！！

「なあ、みちる。今度の日曜日暇か？」

「日曜日？すまん！その日はどうしても抜け出せない用事が入っている」

「そっか。ならしょうがねえな」

この会話からも御理解いただけただろうか。
そう！俺とみちるは付き合っているのだ！！
でも今週のデートは中止のようだな。

そして日曜日

俺は今日は午前中は伊賀流の修行をしていた。

といっても、俺が受けたのではない。俺は師範代である。

師範は親父。

親父曰く、俺には今や誰も勝てないらしい。

だから俺は修行と言っても個人でやるしかない。組み手の時は親父が相手をしてくれる。

誰も勝てないってことだけが理由じゃないんだけどね・・・。
親父は忍者刀を使う。しかし、俺は刀を使っている。これも俺が特殊だと言わしめるところだ。

忍者は時と場合によって使う武器を変える。だが、普通は忍者刀や小刀などだ。

それは普段の諜報活動などの際、邪魔にならずに素早く動くのを念頭に置いているためだ。

しかし、そんなことは俺には関係ない。今までもこの日本刀1本で諜報活動など多くの任務を行ってきたからだ。
仕事なら仕方なく何でもするさ。

午前中の修行を終え、午後は街に出ていた。特に目的は無い。
ただ、なんとなくだ。

「あれ？」

前から歩いてくるのは、幼馴染のみちるだ。
それも男と歩いてきている。

「よう。みちる」

「刃!？」

みちるは俺に会わないとでも思っていたのだろう。かなり驚いていた。

「なんでこんなところにいるんだ?それにそいつ誰？」

「この人は家の門下生で、同じ高校の先輩で・・・」

「そうか。それで?今日はそいつとデートか?俺とのデートは断ったのか?」

「違うの!」

「何が違う!? もう・・・いい」

「刃!？」

「お幸せにな」

「刃!！」

「ちょっと待ってくれないか？」

「なんだよ？」

「みちるさんの言うことは本当のことだ。それに俺とみちるさんは付き合っていない」

「今はまだだろ？」

「そうじゃない!俺にはちゃんと彼女がいるし、今日はみちるさんが買物に付き合ってほしいというから付き合っただけのことだ!」

「二股か」

「違うといっているだろ!」

先輩とやらは俺の肩を掴んできた。

「触るな」

俺は殺気を放った。

周囲の人間を始めとした先輩は気絶した。

みちるは俺が本当にこの殺気を出した人間なのか、信じられない顔でこっちを見ていた。

「ふん。ただの雑魚が・・・」

俺は家に帰る為に歩を進めた。

それになぜかみちるが付いてきた。

「なぜ付いてくる？」

「刃が・・・心配だから」

「だったらあの先輩はいいのか？」

「先輩よりも刃の方が心配だから・・・」
「・・・チツ」

俺たちは家の近くまで来ただろう。

「あっ・・・」

「ん？・・・みちる！」

みちるが急に道路に飛び出した。

みちるは道路にいた子どもを助けようとした。

キキィー

そしてはねられた。

みちるではなく、俺がだ。

俺は子どもを抱えたみちるを突き飛ばし、変わりにはねられたよう
だ。

とっさのことだったし、直前までみちるに裏切られたことで頭にき
ていたようで、忍術を使うことも忘れていた。

裏切られてもみちるのこと好きだったんだろうな。

なんか、未練がましい男だ。

なんか体が痛い。

今までこんな痛み負ったこと無いのに・・・。

死ぬのかな・・・。

でも、別にいいかな。

もう俺にはなにもない。

あっ、みちる・・・。

「刃！刃！死ぬな刃！！私を・・・残していかないでくれ・・・」

なんで泣いてんだよ。

なんか言ってるんだろうけど、でも何言ってるか分からねえや。

これで伊賀流も他の流派も俺がいなくなって肩の荷が降りたかな。

そして、俺は死んだ。

神との対面とチート能力

俺はみちるを助けて死んだ。

今はそれだけでとつても幸せだ。たとえ死んだことが事実だとしてもどうでもいい。

みちるが生きているのなら。

幸せになれるよ、みちる。

「ん・・・ここは？」

俺は真っ白な何もない空間にいた。

「ここは天国か？」

『天国ではない』

「誰だ!？」

『我はゼウス』

「え？何だって？」

『我の名はゼウス。神々の王じゃ』

「ゼウス？本当に？なんで？これは夢？」

『夢ではない。お主は確かに死んだ。しかし、お主はあそこで死ぬはずではなかった。実際にはあのみちるという者が死ぬはずじゃった。それをお主が助けたのじゃ』

「そうだったのか。まあ、みちるのこと好きだったからな。死ななくて良かったよ」

『お主は優しい男じゃな。今回のことは誠にすまなかった。よって、お主にもう一度チャンスを与え幼と思う。これは我ら神々が話し合った結果じゃ』

「本当か!？じゃあ、生き返らせてくれるのか？」

『そうじゃが、正確には違う』

『どういうことだ？』

『お主を生き返らせることは事実。しかし、あの世界にはもう二度と戻ることは出来ん』

「そう・・・か」

『そのかわりと言ってはなんじゃが、神々から1つずつ力を与えようと思っておるのじゃ』

「好きにしてくれ」

『分かった。お主は今のもままでも十分強いが、まだ力を欲するか？』

「俺は好きにしろと言った。それに、俺はまだまだ強くない。これからどこにいくか分からないけど、俺よりも強い奴はいるんじゃないのか？俺はもっと強くなる！だから力をくれ！」

『それでは、まずは儂の兄のハデスからじゃが、お主には肉体強化、魔力強化を施した。お主の肉体は力、速さなどが強化され、更には魔法を使うのに必要な魔力も強化され、まあ、両方とも最強になっておる』

「チートだな・・・」

『次にじゃが、まあ、これは他の神々なんじゃがこれから行くことになる世界の魔法を全て使わせろと言ってきてのう。じゃから、まずは魔法の説明からじゃ。よいな？』

ゼウスは魔法についての説明を شدした。

俺もこれから行く世界で困りたくないので、必死に覚えた。

魔法を使うには、頭の中でイメージをして魔法の名を言霊として言えればいい。

しかし、上位の魔術に関しては詠唱が必要になってくる。

また、魔法の種類だが、下級魔法、上級魔法、そして神級魔法と分けられており、普通は下級魔法を2つ使え、3つ以上と言うのは少なく、更には上級魔法が使えれば王国の宮廷魔術師になれるのだそ

うだ。これから行く世界では神級魔法を使えるものはいないらしく、
そもそも文献で登場しているんだけどあって、あるのかどうかも分か
っていないらしい。

そんな魔法使っているのかよ……。

下級魔法の種類は次の通りだ。

火・水・風・雷・土

上級魔法の種類は次の通りだ。

光・闇

神級魔法の種類は次の通りだ。

時・創造・空間

これらを俺が使えるのか……俺は人を外れたかもな。
ただ、創造に関しては制約がある。

生命の創造は出来ない。新たな世界の創造が出来ないことだ。

まあ、元から興味が無いから大丈夫だ。

『これで魔法に関しては完璧だろう。それでは、最後に農からの贈
り物じゃが、お主の部屋には漫画やゲームが多くあったな』

「ああ。好きなんだよ」

『そうか。それら漫画やゲームの中に出てくる能力やアイテム、武
器が使えるようになったぞ』

「はっ！？ そんなことしているのかよ！？ ただでさえチートだって
のに」

『面白いから良い！！』

「本当に神かよ……」

『それにお主なら悪用はせぬと分かっているからの』

「ふ、ふん！」

『良いツンデレ具合じゃな』

「ツンデレじゃないわ!」

『そうじゃったそうじゃった。お主はこれから勇者として召喚されるじゃろう。しかし、お主1人ではない。お主の助けた想い人も一緒じゃ』

「みちるも!?!」

『うむ。どうやら勇者召喚の儀によって強制召喚されたようじゃな』
「チッ!分かった。じゃあ、早速向かわせてくれ」

『分かった。最後に、お主の力は我らに匹敵するじゃろう。お主1人でも世界征服が可能じゃからな。じゃから、悪用だけはせぬようにしてもらいたい』

「当たり前だ。俺は好きな時にこの力を使うが、それは俺が守りたい奴を守る時だけだ」

『お主に力を与えて正解だったようじゃ』

「俺を生き返らせるだけじゃなく、力も与えてくれてありがとうございました」

「刃、俺はお主を応援しておる」

「・・・これがそうか」

「ん・・・刃?」

「起きたか」

「刃!どうしてだ?死んだはずでは?」

「死んだ方が良かったか?」

「馬鹿を言え!私は・・・私は・・・」

「すまなかった。またみちるに会えて嬉しいよ」

「本当か！？本当にそう思っているのか？」

「ああ。当たり前だろ。俺はお前が好きだからな」
「うん・・・うん。ありがとう」

泣くほど心配してくれていたんだな。

みちるには本当に悪い事をしてしまったな。

「みちる、悪かったな」

「私こそ、ごめんね」

「いいよ。それよりも・・・」

「ん？」

周りを見渡せば辺りをローブで囲んでいる連中がいる。

「あの、どちらが勇者様ですか？」

「勇者？」

「はい。我々は今、魔王に脅かされています」

「魔王とはどういうことだ？」

「魔王は前の勇者が倒したと聞いていました。しかし、その魔王が復活したようで、最近魔物が活発になり、尚且つ増えているように思えます。ですから、私たちをお助け下さい！」

その一歩前に出て説明をしてくれた少女が頭を下げると、周りのローブに身を包んだ奴らも一斉に頭を下げてきた。

俺はなってもいい。

ただ、俺はチート性能を手に入れた。

その力を勇者として振うべきなのだろうか。

「私かなろう」

「え？」

「だから、私になると言っているんだ」

「みちる、何を言ってるんだ？危ないだろ！」

「私は目の前で困っている人たちを見捨てることは出来ない性分なのでな」

「だったら、だったら俺になる！」

「いや、私はもう刃を失いたくない」

俺はもうなにも言えなかった。

みちるの覚悟、そして俺が死んだことがみちるにどんなに辛い思いをさせていたのかが分かっていたから。

「私は文月みちるだ」

「・・・俺は霧間 刃だ」

「私はこのアロアルド国の巫女、エリー・アロアルドです」

「よろしく頼む」

「それではまず国王にお会いいただきますのでこちらへどうぞ」

俺たちは国王の間へと誘われた。

「国王様、私は文月みちると申します」

「俺は霧間 刃だ」

俺は自己紹介をすると周りがザワザワしだした。

当然だろうな。王様なんてクソくらえだ！

「私はこの国の国王をさせてもらっている、マリア・アロアルドです。娘のエリーから説明があったかと思いますが、今この国・・・いえ、この国だけじゃなく、他国も魔王の脅威に脅かされています」

「他国？」

「この国は主に人間が住んでいます。他にも、エルフ族が住むエー

ラ国、竜人族が住むドラ国などがあります。その他にも民族の差別なく、住んでいる国など様々な国があります。そして魔王のいる魔族が住んでいる国はダンガランス国と言います」

国王はこの国、この世界の地理的なことを色々と教えてくれた。

そして今日はこれで休むことになった。

みちるは部屋に向かったが、俺は残った。

国王に話があったからだ。

「話がある」

「はい。なんでしょうか？」

「俺は明日ここを出る」

また周りがざわつきだした。その際、「あの者はいずれ我らの脅威となる」とか「あんな失礼な男は即刻追い出すべきだ」などと聞こえた。

頭に來たから抑えめの殺気をそいつらにむかって放ったらビビって何も話せなくなった。

実力はないのに口しか出せない弱い奴はこの世界にもいるようだ。

国王も顔を青くしている。

「すまなかったな。少々頭に來たんでね」

「いえ、こちらこそ申し訳ありませんでした」

「いや、あんたが悪いわけじゃない」

「お優しいですね」

「そんなのじゃないさ」

「ふふっ。そういうことにおきましよう。それで、明日ここを出るというの？」

「ああ。勇者はみちるだ。だから、あいつの負担が少しでも軽くなるように俺は1人で行動させてもらう。そして情報も手に入れてき

てやる」

「そういうことですか。ならば良いでしょう。誰かジン殿に旅費とその他必要な物資を」

「はっ！」

「ありがとうございます。みちるには俺から言っておきます」

「その方が良いでしょう」

その後旅費や干し肉などの入ったカバンを受け取り、部屋に戻った。なんと旅費で金貨を30枚を貰った。

これはかなりの大金だ。

銅貨100枚で銀貨1枚。銀貨100枚で金貨1枚。金貨100枚で白金貨1枚である。

平民は金貨1枚で1年は暮らしていける。白金貨は主に貴族や王族での取引でしか使われない。

部屋に戻り……。

「みちる、いるか？」

「どうしたの、刃？」

俺はみちるの部屋に行った。

「俺、明日から旅に出るからさ」

「どうしてだ？」

「お前の負担を少しでも軽くしたかったからかな」

「どういうことだ？」

「お前は明日からすぐに魔王を倒しに行くというわけではない。修行をして力をつけてからだから、それがいつになるか分からない。だったらその間に俺が魔族を倒していき、情報収集していけばいいんじゃないか？」

「だが、お前も修行しなくてはいけないだろ！」

「俺は十分強い。お前なら分かるはずだ。今の俺の強さ。俺も少しは役に立ちたいんだよ。分かってくれ」

「分かった。・・・でも無理だけはしないでくれ」

「分かっている。無理だけはしない」

「約束だ！」

「うん！」

「じゃあな。頑張れよ！」

「待ってくれ、刃！」

「ん？・・・んん！？」

俺はいきなりのことに驚いて目の前が真っ白くなった。なぜなら、みちるがいきなり俺の唇をふさいだからだ。何でって？

もちろんみちるの唇でさ。

「ぷはぁ・・・」

「おい、みちる。お前一体どういうつもりだ！」

「もう会えないと思うと寂しくてな」

「分かった。今日は一緒にいよう。それでいいか？」

「・・・うん」

その後俺とみちるは2人で朝まで過ごした。

何かあったんじゃないかって？

御想像にお任せします！！

旅立ちと出会いとギルド

昨日はみちると一緒に寝た。

「じゃあ、俺行くな」

「気を付けていってくるのだぞ。くれぐれも無理はしないでくれ」
「分かってるよ。無理はしないさ」

「じゃあ、頑張ってこい！私も頑張る！」

「ああ。それじゃ、みちるのことよろしくお願いします」

「大丈夫ですから。心配なさらずに」

「それでは」

こうして俺は旅に出た。

みちるの為に・・・。

「村に着いたらどうするかなあ・・・」

俺は今、街道を歩いてまずは村に行くことにした。

「まずは情報収集だよな、やっぱり」

村に着いたらやることを決めて足取りも軽やかに村へと進んでいく。

「あつ、そうだ。魔法を使って見よう」

周りに誰もいないことを確認してから、道を外れて森の中に入り空間魔法を使用した。

何をしたかって？

鞆が大きくて重かったからポケットの中に無限空間を作れるかって考えたんですよ。

ちなみに、大成功した。

空間の中にはいくつか部屋を作って頭の中で思った部屋が開けるようにした。

中には金庫、冷蔵庫がある。これからどんどん増えていくことだろう。

「次は・・・よし、やっぱりあれをしようかな」

俺は次に創造魔法を使って武器と防具を作った。

まず武器は日本刀を作ることにした。

日本刀と言ってもこの世界での武器と前の世界での武器は違うだろうし、魔法に対しての対処も必要となるだろう。

だから、素材は伝説の鉱石ヒイロカネにした。

魔法の伝導率はこれ以上ないぐらいだろう。

切れ味も最高にした。鞘が刀の切れ味に負けないように硬さをあげた。

刀身は赤黒く、鞘と柄も黒く、闇夜で活動するにはもってこいの色にした。

他にも手裏剣に籠手も手裏剣に関しては普通の鉄で作り、籠手はヒイロカネで作った。

同様に黒。

次に防具を作った。

防具は鎧のような重厚感のあるようなのは忍としての動きが生かせない為、軽装備にした。

それも元の世界の忍装束のようなものだ。

色は黒。

繊維はこれもヒイロカネを繊維状にしたもの。

ヒビイロカネ自体軽い鉱石なのだが、これも創造魔法で重さを変えた。

この防具はいくつか作っておいた。

そしてローブも作った。

最後にアクセサリとして、指輪を作った。指輪には防護魔法と補助魔法を使った。

防護魔法として、敵の攻撃を完全にシャットアウトすることが出来る。

分かりやすく言えばA・T・フィールドのようなものだ。

そして物理防御力が上がるプロテス、魔法防御力が上がるシエル。

更には素早さが上がるヘイストもかけた。これで俺の速さが上がる。

ついでに回復役としてエリクサーを大量に作っておいた。

これで俺の空間倉庫の中に新たにエリクサーの為の部屋が出来た。

そして俺は装備をして一路村を目指す。

「迷った・・・」

俺はいきなり迷っていた。

「どうしようか・・・ん？今何か聞こえたような・・・」

グアアアアアア！！

「やっぱり気のせいじゃなかったか」

俺は何か分らない声のした方へと駆けていった。

「ハア・・・ハア・・・」

そこには、羽を持っていないゴツゴツとしたドラゴンらしい生物と戦っている1人の騎士がいた。

その周りには騎士が倒したのだろう魔獣が沢山倒れており、中には赤いドラゴンも倒れている。

「あの騎士がやったのか・・・。でもあの怪我じゃ無理だな・・・」

騎士は体中から血が出ており、今対峙しているだけでも凄い。

「私はこんなところでは負けられんのだ！」

騎士が自分に喝を入れるかのように叫ぶとドラゴン？が口から炎を吐いてきた。

「まずい！！」

グオオオオオオオ！！

ドラゴン？はそこに誰もいないことを確認したのか、満足げに吼えた。

しかし、騎士は死んでいなかった。
なぜなら、俺が助けたからさ。

「おい！大丈夫か？」

「・・・君は？」

「俺は霧間 刃だ」

「そうか・・・。ジン殿、助けていただいて感謝する。しかし、これは私の戦い。手出し無用でお願いする」

「その体じゃ無理だ。しょうがないから、これを飲んでここにいろ！あいつは俺が倒してやるから」

俺はさっき作っておいたエリクサーを騎士に渡した。

「分かった。しかし、奴を倒すのは無理だろう。奴はロックドラゴン。SSランクだ」

「？よく分からんが、俺なら大丈夫だから安心して待ってろ」

「待て、ジン殿！」

「よう。岩野郎。もう勝った気でいるのか？」

グルオオオオオ！！

ロックドラゴンは俺を見つけるとさっきのように炎を吐いてきた。

「甘い・・・」

俺はヘイストで強化されたスピードをもってドラゴンの首の上に行き、作りだした日本刀『黒獅子』を上から下に振り上げ、首を一刀両断した。

「ふう・・・黒獅子切れ味強すぎたかな？」

「い、今のは一体・・・」

「もう大丈夫か？」

「ああ。おかげさまでな。この薬は凄いな。今度分けてもらいたいものだ」

「それはエリクサーというんだ。今度分けてやるよ」

「本当か！？それはありがたい。それよりも今何をやったんだ？」

「何って？」

「今、君が消えたと思ったらロックドラゴンの首が落ちて首の側に立っていたんだが・・・」

「速すぎたかな？」

「・・・それでは君の速度だと？」

「まあ・・・ね」

「凄いな君は。そんな実力の持ち主はこの世界にはいないぞ」

「ありがとう。素直に嬉しいよ。俺はさっきも言ったけど、霧間刃だ。ジンと呼んでくれ」

「私はギルドでAランクハンターをしている、ステラ・ソシナダだ。ステラと呼んでくれ」

「そうか。それじゃ、ステラ。こんなところで何をしていたんだ？」

「何って、ギルドのクエストをしていたのだ。レッドドラゴンを倒してくれば良かったのだが、そこに他の魔獣、それに君が倒したロックドラゴンまで出てきてしまってたね」

「そうだったのか。ところでギルドってこの先の村で登録出来るんだよね？」

「ああ。そうだな」

「じゃあ、登録しようかな。それと、さっきからSSやら、Aランクだと言っているが、なんのことを言っているんだ？」

「知らないのか！？ランクとはギルドランクのことを言い、上からZ、SS、S、A、B、C、D、Eランクとなっている。ちなみに私は上から4番目のAランクだ。君はまだ登録をしていないからEランクからになる。ランクを上げるには、同じランクのクエストを3回以上するか、1つ上のランクを2回以上、2つ以上のランクを1回すれば上がる。ちなみにSランク以上のクエストを成功させた

り、魔獣を倒せば一気に上がるぞ。だからこのロックドラゴンを持って行けば君のランクは一気に上がるということだ」

「へえ、そうだったのか。ありがとな。でもこのロックドラゴンはステラが戦っていたんだろ？」

「確かにそうだが、倒したのは君だ。それに私では敵わなかったさ」
「もつと経験をしていけば強くなるよ。なんなら俺と一緒に旅をしないか？」

「君と？」

「ああ」

そして俺はステラに旅の目的を話した。

「なるほどな。でも本当に私が一緒に行ってもいいのかい？逆に足手まといになるんじゃないか？」

「大丈夫だ。ステラは十分強いから。なんなら修行もしようか？」

「いいのか？」

「もちろんだ。俺と一緒に修行をして一緒に強くなろう！」

「分かった。これからよろしく頼むよ」

「こちらこそよろしく」

「ところでこの魔獣たちはどうするんだ？」

「倒した魔物たちはギルドに持って行けば課金してくれるし、クエスト達成の証拠に魔獣の部位が必要になる。だから部位を剥ぎ取らなくちゃいけないんだ」

「じゃあ、まるごと持って行ってもいいのか？」

「まあ、その方がいいが物理的に無理だからな。だから部位だけ持って行くんだ」

「ふーん……。ちょっと下がってて」

「何をするんだ？」

「良い事さ」

「？」

俺はステラを下がらせ、倒した魔物たちに向けて闇を広げた。

そして闇の中に引きずりこんで、空間倉庫の中に入れた。

闇と空間倉庫を繋げたので、闇に取り込まれた物は自動で区分され、それぞれの部屋に入れられる。

魔獣は魔獣部屋へと入る。

「今何をしたのだ？」

「説明するから信じてほしい」

俺の全てを話した。

これから一緒に旅するんだから隠し事はしたくなかったからだ。

「にわかには信じがたいが、ジンのさっきの強さを見たら信じてしまうな」

「ありがとう。ステラはこれから一緒に旅をする仲間だから隠し事はしたくなかったんだ」

「そ、そうか／＼／」

「顔が赤いけどなんかあった？」

「べ、別に何にもないぞ」

「ならいいんだけどね」

俺たちはギルドのある村に着いて、ギルドに寄った。

「ここがギルドだ。まずは登録をしよう」

「分かった」

そしてカウンターに行き、受付嬢らしい女性に話しかけた。

「すみません。ギルドの登録をお願いしたいのですが」

「はいはい。それじゃあ、ここに名前を書いてくださいね」

「はい」

「名前は・・・ジン・キリマさんですね。受け付けました。私はこの村のギルドの受付をしています、サラと言います。よろしくです。はい、これがギルドカードです」

「こちらこそよろしく願います。えっと、ギルドカード？」

「ギルドカードとは、自分の名前の現在のランクが書かれています。ギルドカードが御自身の身分証明書になりますので、紛失された場合には銀貨30枚頂きます」

「分かりました。ありがとうございます」

「ジンよ、部位を出してはもらえんか？」

「そうですね。でもここじゃ狭いので出せないですね。・・・どこか広い所ってありますか？」

「はいはい。ギルドの庭がありますからそちらへどうぞ」

「それじゃ、出しますね」

そして、庭にステラが倒した魔獣と、ロックドラゴンを全部出した。

「え!？」

「サラさん？」

「驚くのも無理はない」

「どうして？」

「まずはどこからともなく出したこと。それに、ロックドラゴンの

首を斬って倒していて、尚且つ一匹持ってきたことだ」

「そっか」

その後サラが意識を戻し、報酬とランクアップが行われた。

「それでは、まずはステラさん。おめでとうございます。Sランクに上がりました。それとこちらが報酬の金貨5枚と銀貨30枚です」

「ありがとう」

「良かったな、ステラ」

「ああ。ありがとうジン」

「そしてこちらがジンさんのギルドカードです。おめでとうございます。一気にBランクに上がりました。それからこちらが報酬の金貨50枚です」

「え？金貨50枚？」

「はい。ロックドラゴンはSSランクです。それにロックドラゴンは最近被害が多かったですから。それを一刀両断で、しかも1人でなんて……。普通は宮廷魔術師20人、宮廷騎士20人程度でやっと倒せる程なのに……」

「まあ、ジンは規格外だからな」

「否定はしないさ」

こうして無事？ギルド登録を済ませ、新しい仲間も加わり、新たな旅へと向かう。

登場人物紹介（前書き）

混乱しないように今までの登場人物をまとめておきたいと思っています。登場人物は名前の出てきた人物というわけではなく、主にこれから登場するであろう人物だけをまとめていきたい思います。これからも出てくるので、その度に更新していくつもりです。

登場人物紹介

霧間 きりま 刃 じん

黒髪黒目の17歳の高校2年生。
身長181cmでイケメンだが、自身に自覚はない。

伊賀流忍者師範代。

現在生きている忍者の中で最強と言われている父親を超える忍力を持つ、若干17歳ながらに最強の忍と言われている。その為、伊賀流のみならず他流派からも妬まれている。

使用武器は日本刀『黒獅子^{くろしし}』

防具は忍装束に黒のローブを着ている。
また、手裏剣や苦無^{くまい}などの忍具を扱う。

29

使用できる魔法は下級魔法と上級魔法、神級魔法全てを使える。
また、ゼウスからは漫画・ゲーム内にある能力、アイテム・武器を使用可能。

他の神々からは身体強化・魔力強化、全属性の魔法を使用可能に。

元の世界で幼馴染のみちるを助ける為に死んで神によって異世界に飛ばされてからは勇者になった恋人で幼馴染のみちるの負担を軽くするための旅に出る。

旅の途中で出会ったステラと共にギルドのクエストを行いながら旅をしている。

現在Bランクハンター。

文月 みちる（ふみつき みちる）

主人公と同じ高校に通う2年生で17歳。

黒髪で腰まで伸ばしており、ポニーテールにしている。

家が剣道の道場なので、小さい頃から剣道に勤しんでいるので高校1年の時に全国制覇を成し遂げた。

勉学でも優秀で学年5位には常に入っている。

文武両道であり容姿もあって男子女子ともに人気が高い。

主人公とは幼馴染であり恋人である。

道場の門下生で高校の先輩に、主人公にプレゼントする物買いに付き合ってもらっている最中に主人公に出会い、その帰りに道路に飛び出した子供を助けようとして道路に飛び出し、轢かれそうになったところを主人公に助けられた。しかし、主人公が死んだことで酷い悲しみに落ちたが、すぐに勇者召喚の儀式によってアロアルド国に召喚されたが、そこで死んだはずの主人公に再開した。

アロアルド国が魔王軍によって被害を受けていることを知り、勇者としてこの国と世界を平和に導こうと決意する。

武器は国の宝物庫にあった細剣を使用。

細剣には金文字で見知らぬ文字が書かれている。

細剣を持った瞬間に多くの知識と魔力を得ることが出来た。

使用出来る魔法は下級魔法の水と風に雷、そして上級魔法の光の4つである。

今は立派な勇者になる為に修行中である。

エリー・アロアルド

アロアルド国の巫女であり王女様。

勇者召喚の儀を行い刃とみちるの2人を召喚した。

魔法に関しては国トップクラス。

火、水、風の魔法を使用。

現在はみちるの魔法修行を手伝っている。

マリア・アロアルド

アロアルド国の女王様。

未亡人。

主人公に対して若干想うところがあるようだ。

ステラ・ソシナダ

Sランクハンター。

主人公が国から次の村に行く途中で出会った女性騎士。

その時に受けていたギルドからのクエストの途中でSSランクモンスターロックドラゴンに遭遇し、危ないところを主人公に助けられた。それからは一緒に行動するようになる。主人公に対して恋愛感情を持ち合わせているが、話に聞いた文月みちるのことがあって中々切り出せずにいる。

使用武器はバスターソード

防具は軽装鎧にバックラーなど、動きやすいように軽めの防具にしながらもしっかりと防御を上げている。

魔法は火、水を使用可能。

剣の腕だけなら宮廷騎士団長になれるだけの実力を擁している。

筋肉隆々というわけではなく細腕ながらもバスターソードを持っている。

全体的に引き締まっている。

リュック・ブルヌメリア

髪型はショートで緑色。14歳で140cm程と小柄だが、まだ成長期でこれから期待だと本人は言う。

親がお金に困って奴隷として売った。その後主人公に買われ、親に売られたショックで生きていく元気が無くなり、買われたことで奴隷として生きていくことを心に固く誓っていたが、主人公に奴隷として買われたのではないことと、主人公の優しさに触れたことで主人公を「お兄ちゃん」と呼んで本当の家族のように慕い、旅に付き添うようになる。

一応魔法は使えるが、今まで戦闘経験は無い。当分は主人公の癒し担当である。

使用魔法は雷と土だが、うまく使えない。

使用武器は無し！！

ソフィー・エーラ

エルフ族の21歳。長身で170cm前後ある。

髪は銀色に輝き、腰まで長くスラッとした体格で男女問わずに美しいと思える容姿をしている。

なぜ売れ残っていたのか不思議に思えるほど。

リュックと一緒に主人公に買われたが、奴隷を肯定する国や貴族たちに対しての憤りと奴隷を奴隷としないで1人の人として見る主人公の優しさに心を打たれ、仲間になるとともに、主人公を守ると誓った。また、主人公にベタ惚れである。その為、ステラやリュックと主人公を巡ってよく喧嘩する。主人公のことは「ご主人様」と呼ぶ。

使用武器は弓。

使用魔法は風と水。

風魔法で放った弓矢を自在に動かせる。

水魔法は攻撃と回復に分かれているが、ソフィーは水魔法で武器を作ることが可能。弓矢を作り出し、周囲に展開してそれらを敵に対して放てる。

最悪の夢とかけがえのない仲間

俺は昔同じ流派と他流派からいじめにあっていた。

力が強すぎたからだ。つまりは俺の力に嫉妬したのだ。

俺はこの力を誇示したことはない。望んで手に入れたわけじゃない。生まれた時にはもうあった。

俺はいつも1人だった。だからいつも1人で修行した。鍛練した。周りに味方はいなかった。

いや、親だけが味方だった。親父はおれの鍛練に付き合ってくれた。周りから白い目で見られても俺の味方でいてくれた。

『貴様はいらないんだよ!』『お前がいなければ俺が師範代になれたんだ!』『何で生まれてきたんだ!』

色んなことを言われた。

『お父さん。僕はいない子なの?生まれてきちゃいけなかったの?生まれてきたからいじめられてるの?』

『刃はいらない子なんかじゃない』

「・・・夢?」

「大丈夫か?だいぶうなされていたぞ?」

「心配させてすまなかった。ちょっと昔の夢を見ていた」

「そう・・・。じゃあ、何も聞かないわ」

「いいのか?」

「ええ。心配したけど・・・」

「ごめんな。実は・・・」

俺は小さい頃にされていたいじめのこと、その際に言われたこと、親父のこと。

だいぶ前に乗り越えたと思ったことを夢で見た。
なんで今更……。

「そうだったのか。でも私はジンの味方だ！」

「ああ。ありがとう。俺もステラの味方だからな」

「うむ。これから何かあったら私に相談すると良いぞ！」

「ありがたく相談させてもらうよ」

ステラのおかげで俺は気が楽になった。

まだ数日しか経っていないが、ステラとはすぐに打ち解けた。

ステラは何かと俺に気を使ってくれる。

俺はステラをこれから先も守っていかうと考え始めていた。

それからギルドで新たに護衛任務受け、護衛先の街まで来ていた。道中全く襲われることは無かった。魔王が復活したんだから魔族や魔物が活発になっているはず。なのに襲われなかった。これは何かあるはずだ。でも考え過ぎかな？

「これは今回の報酬です」

「ありがとう」

報酬として銀貨5枚を貰った。

「この街に来た理由はなんだ？」

「それは新たな武器と防具を買うためだ」

「そっか。もうボロボロだもんね」

「うむ。あのロックドラゴンと戦ったことで、とうに限界は来てい

たようだ」

ステラはそれでもあの村では新調しなかった。
あの村に武器屋や防具屋はあったのだが、良いものが無かったようだからだ。

「この街には良いところがあるのか？」

「この街は元々ギルドの本社あり、その為に高ランクの奴らが多くいるし、クエストも高ランクの物が沢山集まっている。そのせいか武器屋や防具屋が多く、鍛冶師も多くいるのだ」

「だからこの街でか」

「うむ。良いものがあると思ってな」

「なんなら、俺が作ってやろうか？」

「いや、そこまでジンに甘えられないからな。その気持ちだけでも受け取っておくでしょう」

「そうか。でもこれだけは受け取ってほしい」

俺はステラに指輪を渡した。

それはただの指輪ではなく、俺の腕輪とほぼ同じ力を持った指輪だ。

「これは俺の腕輪と同じで素早さを上げ、物理防御、魔法防御を上げる。そして、バリアを張ることも出来る」

「そんなものを貰ってもいいのか？」

「当然だ。ステラは俺にとってかけがえのない大切な仲間だ。失いたくない。俺が側にいる時は俺が守ってやる！でも俺が側にいない時にステラを守ってくれるお守りだ」

「あ、ありがとう／＼／」

「でも俺も助けてもらうことがあると思うから、その時はよろしくな」

「ジンを守るのは私の役目だからな！まかせてもらおう！」

「ああ。まかせた！」

こうして俺はステラに指輪を渡し、ステラの新たな武器と防具を買いに行った。

ステラは以前と同じバスターソードを買った。

そして防具は以前は重装備であったが、動きが制限されてしまい十分に力が発揮出来なかったらしい。
だから今回は軽装備にした。

「良かったな、良い物があって」

「ああ。この街に来て良かったよ」

「これからどうする？宿を取って休むか？」

「そうだな、そうしよう」

俺とステラは宿を取り、休むことにした。

奴隸と解放者（前書き）

今回もお楽しみください

奴隷と解放者

ステラの武器を新調した次の日。

俺とステラはクエストを受注する為にギルドへと足を運んでいた。ギルドに入ると本部なのだろう、前の村のギルドとは違い綺麗になっていた。

それでも酒の匂いはする。

俺とステラが入ると酒を飲んでいた連中、クエストを選んでいた連中たちが俺たちの方を見たきた。

全員目付きが怖い！！

みんな前の世界にいたら目付きだけで捕まるぞ！！

「おいおい、ここがどこだか知ってきたのか？」

筋肉隆々の身長が2mはあるだろう大男が睨みをきかせながら取り巻きと近づいてきた。

正直酒臭いから近づかないでもらいたいな。

「ここはギルドの本部だぜ？お前たちみたいなヒョロっとしたのお子様が来ちゃいけないんだ。分かったらとっとと帰んな」

「ジン、行こう。相手にするだけ無駄だ」

「そうだな」

「おいおい。ちょっと待てよ。それはどういうことだ？俺は親切心から言ってるんだぜ？」

「いらぬ世話だ」

「お？お前上玉だな。よし！お前はそこの女を置いてさっさと帰んな。嬢ちゃんも俺らと組んだ方がいいぜ？そんな弱っちいのは捨ててこっち来な」

「あいにくと私にそんな趣味は無い。それにジンは弱くない」

「そうか。残念だ。じゃあ、小僧！お前はここで死ぬんだな！！！！」

シュツ

「俺を・・・どうするんだ？」

「・・・・・・・・・・え？」

ギルドにいた全員が目を疑った。

さっきまで威勢よく噛みついてきた大男が剣を振り下ろし、ジンはもう死んだと誰もが思ったからだ。

だが実際にはそうはいかなかった。

ジンはいつの間にか大男の後ろに立っており、刀を首に当てていたのだから。

「俺はお前たちみたい弱い奴らしか相手に出来ない奴らが嫌いなんだ。いじめは良くないと小さい頃に教わらなかったのか？」

「す、すまねえ。もうしねえよ・・・」

「そうか。もう俺たちに関わるな。もし、関わろうものならその時は・・・遠慮なく殺す」

「わ、分かった」

俺は沸騰していた頭を冷やしながらステラと共にギルドのクエスト受注掲示板へと向かった。

「ステラ、あれなんだ？」

目に着いたのはクエスト受注掲示板の隣に掲載されていた1枚の張り紙。

「それは今度行われる武闘大会のことだ」

「武闘大会？」

「大陸中から腕に覚えのある一癖も二癖もあるような連中が参加するから一筋縄ではいかないだろうな」

「参加したことあるのか？」

「ああ・・・。前の大会にな」

「どうだったんだ？」

「1回戦で負けたんだ」

「そんなに相手は強かったのか？」

「・・・まあ、そんなところだな」

「？」

「そ、それより、ジンも出るのか？」

「うーん。迷ってるけど、優勝賞品が良ければ出ようかな」

「まあ、ジンが出れば優勝間違いないだろうけどな」

「そんなに褒めても何も出ないぞ？それより、この大会は2人で出れないのか？」

「個人と団体の部があるから、出れるぞ。団体では最低2人からだからな。ちなみにこの大会の出場条件はギルドランクがBランク以上だぞ」

「じゃあ、俺とステラ2人で出れるな」

「出るのか!？」

「ああ。2人で優勝しようぜ！」

「そうだな！」

俺とステラは2人でギルドに行き、大会参加の申し込みをした。

その際、ステラの勧めで個人と団体の両方に登録させられた。

大丈夫だろうか？

俺たちはその後Aランクの討伐クエストを受注し、レッサードラゴン30体を討伐してきた。

今回も闇から俺の倉庫に保存し、それをギルドに持って行くと、案の定目を見開いて驚かれた。

報酬は金貨10枚だった。

全部は渡さず、部位を鍛冶屋に持って行き、ステラのバスターソードを強化してもらった。

結果、ステラのバスターソードの火属性の魔力伝導率が上がり、強度も上がった。

俺としては加速ブースターを付けて威力を上げたりしたいんだがな・・・。

俺とステラは鍛冶屋を出て街を散策していた。

「食糧でも買っていこうか」

「ジンの倉庫の中の食料も少なくなってきたのか？」

「ああ。途中で出会った仲間がよく食べる奴だな。野宿した時には干し肉が5枚は食べられるんだ」

「すまない・・・」

ステラはよく食べる。その体のどこに入るのか不思議に思うくらいによく食べる。

まあ、俺も食べる方ではあるがステラには負ける。

「気にするな。ステラの食いつぷりは見てて気持ちがいいし、なぜか幸せな気持ちになる」

「そ、そうか／＼／」

「ああ。お金に困ることもないから心配するな。それに倉庫に入れておけば腐ることは無いから沢山買っていこう」

「うむ！そうだな。では・・・」

結局干し肉を100枚、何の肉か分からないが生肉を50個、野菜類がそれぞれ50個ずつ、疲れた時には糖分が必要になる為、果物を5種類50個ずつ、甘味を100個買った。それでも金貨5枚で済んだ。

「ステラ・・・買ってもいいとはいったがこれは買いすぎでは？」

「すまない・・・」

店で買うたびに変な目で見られた。

その度に「僕たち料理人として今新しい料理を研究しているんです」なんて言わなくてはいけなかった。

「じゃあ、今日はもう帰るか？」

「そうだな。帰って寝るとしよう」

「ん？」

「どうした、ジン」

「ステラ、あれは何だ？」

「あれか・・・。あれは奴隷商人が奴隷を売っているんだ」

俺が見た光景は、奴隷に鎖を繋ぎ、逃げられないようにして1人1人檻の中に閉じ込めて、それを興味津津に見ているいかにも貴族という連中が品定めをしているところだった。

「この世界には奴隷なんているのか!？」

「そうだ。人攫いによって攫われ、ああいった奴隷商に売られたり、親たちがお金に困って子どもを売るなんてことがある」

「そこまで腐っているのか・・・」

「奴隷を禁止している国もある。しかし、それは極一部の国だけだ。この国は貴族が容認している」

俺はこの世界の現実を、闇を見た気がして、言葉を失った。

今、あそこにいる奴隷たちはみんな孤独だ。昔の俺のように・・・。奴隷商の檻の中にはあと2人残っていた。

見たところ10歳ぐらいの少女と、俺と同じかちょっと上ぐらいの女性がいた。

「え？ジン？」

俺は考えるよりも体が先に動いていた。

「すまないが、この2人はいくらかな？」

「へえ、この2人でしたら・・・金貨10枚でさあ」

俺は金貨10枚を渡して2人を連れて人気のない離れた場所に来ていた。

「俺はジン・キリマと言う。ジンと呼んでくれ」

「私はステラ・ソシナダだ。よろしく頼む」

俺は自己紹介をした。ステラも俺の考えを分かってくれたのか俺に続いて自己紹介した。

すると、少女と女性が閉ざしていた口をそれぞれ語った。

「私はリュック・ブルヌメリア。14歳です。リュックとお呼び下さい、ご主人様」

「私はエルフ族のソフィー・エーラ。21歳です。ソフィーとお呼び下さい。この度は我々を買って頂き誠にありがとうございます。

これからはご主人様のお「ちょ、ちょっと待った!」・・・はい?」

「俺はお前たちを奴隷として買ったんじゃない」

「では、どうしてお買い上げになったのですか?」

「それはお前たちを自由にしたかったからだ。だから、これからは自由だ。好きなところに行ってくれて構わない。その度の資金も俺が出そう」

「どうしてご主人様はそこまでなされるんですか?」

「俺は奴隷として同じ人間やエルフ、竜人もその他の亜人も虐げてはいけないと思っている。そんなことをするのはクズのすることだ!」

「ご主人様・・・」

「だから、好きにしてくれ」

「分かりました。では私はご主人様と共に参ります」

「いいのか?もう自由なんだぞ?」

「はい。私はもう身も心もご主人様の物ですわ」

「そ、そうか。分かった。じゃあ、よろしくな。ソフィー」

「はい。ご主人様」

ソフィーは俺に抱きつきながらそう言ってきた。

俺の後ろで俺に突き刺さるかのような視線をステラが送っていたことは・・・関係ないはずだ。

関係・・・ないよな。はははっ・・・。

「リュックはどうしたい?」

「私も・・・ご主人様と一緒にいきたいです」

「でも危ない旅になると思うよ?」

「それでも私はご主人様と一緒にがいいです・・・」

「そうか。じゃあ、一緒に行こうな」

「はい!」

リュックはそう言って俺に飛びついてきた。

そんなリュックの頭を撫でていたらリュックは顔を赤くして嬉しそうにしてくれた。

癒されるなあ。なんて考えていたら、さっきよりも鋭さを増した針のような視線が送られてきて背中に刺さっていた。それも2人分・・。

冷や汗が止まらないよ・・・。

ソフィーがいつまでも俺のことをご主人様と呼ぶから改めてジンと呼ぶようにいうと、「ご主人様が嫌でしたら旦那様とお呼びいたします」なんて言うものだから、ご主人様と呼ぶことを了承してしまった。リュックは俺のことを「お兄ちゃん」と呼んでいる。いいなあ。この響き。

リュックは元々元気ッ子だったようで、先ほどは緊張と、奴隸として親に売られたことがショックで心を閉ざしていたから元気がなかったようだ。だから俺が「じゃあ、俺がリュックのお兄ちゃんになってあげるから、俺がリュックの家族になるから、もう泣かないでいいんだよ」って言ったら、俺の胸で泣いて、泣き終わったら「お兄ちゃん」って呼ばれた。

その際、ステラとソフィーがどっちが俺の妻かで言い争っていたが、いつの間にか2人仲良く笑顔で何かを話していた。俺は決して何にも聞いていないぞ。

ソフィーはエルフ族で魔法が得意らしい。

得意魔法は水、風が使えるようだ。

武器は弓を使用するとのことだ。

なので、ソフィーの弓を買いに行った。
弓矢も買った。

リュックは・・・癒し担当！！

俺は2人にもステラと同じ指輪を渡した。

2人とも顔を真っ赤にしながらも喜んでくれた。

まあ、指輪の力を教えたなら驚いたんだけどね・・・。

リュックは首を傾げながら頭の上に？マークを上げていた。
可愛いなあ、リュックは。

次の街へ（前書き）

初感想をいただきました！

ありがとうございます！！

これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします！！

次の街へ

今は次の街へと歩を進めている。

あれから俺たちはソフィーとリュックの為に新しい服を買ってあげ、お風呂も用意してあげた。

2人は俺が空間魔法で倉庫を持っていると知ると、自分たちで買った物を全部俺に渡した。

俺は新たにソフィーとリュックの部屋を倉庫内に作った。

これで俺の部屋にステラ、ソフィー、リュックの部屋、エリクサー部屋、肉庫、野菜庫、果物庫、武器庫、金庫と確実に増えていった。

ちなみに、最初は冷蔵庫と称して食べ物を一括で保存していたが、ステラが大食漢であって、生肉を買ったため、その匂いが他の食料に尽くんじやないかと心配であった為と、俺は結構綺麗好きなので分かりやすく分けたのだ。

女性陣それぞれの部屋にそれぞれの荷物があるが、下着もある。俺はそれを鞆にまとめて閉まっておいてほしいと頼んだが、女性陣は俺になら下着を見られてもいいと言ってきた。

俺は何とか理性を保ち、譲らなかったなので女性陣は渋々了承してくれた。

今度鞆に空間作っておこうかな……。と考える今日この頃。

「そういえば、新たにソフィーを大会にエントリーできないのか？」
「出来るだろう。次の街のギルドに行ってエントリーシートの更新を行えば可能だろうな」

「そうなのか……。ソフィーはどうする？出たいか？」

「はい。私はご主人様の側を片時も離れていたくありませんし、ご主人様をお守りすると約束しました。ですが……」

「ん？どうしたのだ？」

「いえ、その間リュックちゃんどうするのかと思ひまして・・・」

「そうだな。1人で残すのは少々心配だからな」

「僕なら大丈夫だよお兄ちゃん！」

「本当に大丈夫か？」

「うん！」

「そうか。偉いなリュックは」

「えへへ／＼／＼」

リュックは俺に褒めてもらえたことと頭を撫でてもらえたこと嬉しらしく、顔を真っ赤にしながら喜んでくれた。それを見ていた2人が不満げにしていた。

「じゃあ、リュックはなるべく最前列にいてもらえるようにギルドに行ったら頼んでみよう」

「そうですね」

「分かった」

「ここからだとかの街まであとどれくらいだ？」

「あと3日程というところだろうな」

「3日かぁ・・・。そういえばソフィーはギルドランクはいくつだ？」

「私はまだ登録しておりませんわ」

「「えっ!?!」」

「?」

俺とステラは驚き、リュックは話を聞いていなかったらしく俺とステラが声をあげて驚いている様子をみて首を傾げている。可愛いぞちくしょー!!

「どうかなさいましたか？」

「いやいやソフィーよ、大会はギルドランクBランク以上でないと出れないのだぞ？」

「そうだぞソフィー。このままじゃ大会に出れないぞ」

「そんなの嫌ですわ！ご主人様と一緒に出たいです！」

「じゃあどうするかな・・・」

「ジン、大会は1週間後だ。それまでにソフィーのランクを上げるしかないぞ！それにエントリーシートの更新もしてはいけない」「そうだな。こんなに悠長にしてたらソフィーも大会に出れないな」「ではどうなされるので？」

「こうするさ」

俺は口の端を釣り上げ、傍から見たら悪い事を考えているような顔になっていた。

そして俺はゼウスから貰った能力で、ポケットに手をつ込んで俺の部屋の中にあるクリスタルを取り出した。

「ジン、それはなんだい？」

「ご主人様そのクリスタルをどうなされるのですか？」

「お兄ちゃんそれ頂戴！」

「駄目だよ。これはあげられないな。これはこうするんだ」

俺はそのクリスタルを空中に投げた。

するとそのクリスタルは砕け、上空から大きな竜が飛来した。

グオオオオオオオオオオ！！

「敵！？」

「ドラゴンですか！？」

「お兄ちゃん」

それぞれ迎撃態勢を整える者から、俺の背中に隠れてしまうものでいた。

「こいつは敵じゃない。俺が召喚した召喚獣のバハムートだ」

「バハムート・・・ですか？」

「ジンがしたことなら何も驚きはせんが、今度からは何かする前に必ず一言で詳しく説明してもらおう」

「いや、一言で詳しく説明って結構難しいんじゃないや・・・いや、なんでもないです」

ステラの睨みで反論をやめた。

あのステラの睨みなら、人をなんなく殺せるだろう。

「じゃあ、頼んだ」

俺はバハムートにそう言うのと、全員を背中に乗せ飛び立った。

バハムートは俺たちがいる背中に対して魔法を張りながら飛んでくれたので、高速で飛びながらも快適だった。

そして、馬車で3日はかかる距離をわずか半日で飛び、その日の夕方にはもう街の近くの森まで来ていた。さすがに、バハムートに乗ったまま街に降りるわけにもいかないので、森で降ろしてもらい、バハムートに礼を言って戻ってもらった。次は誰を呼ぼうかな。

降りた森で魔獣の奇襲を受けたが、返り討ちにして俺の闇に入れた。その後街に着いてギルドまで行き、ソフィーのギルドランクの登録を行った。

リュックが「私もギルドに登録する」と言ってきかなかったので、

一応登録したが、一緒にクエストをする気はなかった。今はまだ。これからステラ、ソフィーと修行をしていき、ある程度力がついたら一緒に行くことにしよう。そう考えながらも、俺ってシスコン？なんて考えている俺がいた。

「じゃあ、今日は宿を取って体を休めよう」

「そうだな。明日はクエストに行くのだからな」

「そうですわね」

「僕も行くー」

おいおい・・・。

相談したらこうなった! (前書き)

今回はかなりの急展開です。
注意して読んで下さい。

相談したらこうなった!

今俺は動けないでいる。

なぜなら、俺の右と左にステラとソフィーが。俺の上にリュックが乗っている。

寝辛いと思って起きてみたらこうなっていたのだ。

なんという幸せな・・・いやいや違うから。

何とかこの場を脱しなくては・・・。

それかた半刻。

無理でした。

腕を抜こうとしてもギュツとされて抜けないし、リュックが乗っているから動けない。

万事休す。

「う・・・ん?」

「おはようステラ」

「おはようジン」

「眠そうなところ悪いが、起きてくれると助かる」

「おお! そうだった。悪かったな」

「いや、別に良いさ。ところでどうしてここで寝てたんだ? 部屋ならちゃんと自分の部屋を取っただろう」

「それはだな、その・・・」

「?」

「ソフィーがジンの部屋に入っていくのを見かけてな、それで私も入っていったらソフィーがジンのベットに入るところだったのだ。

だから私は注意しようとしたのだが、ソフィーにそそのかされてな・・・」

「そうだったのか」

「そ、その・・・」

「ん？」

「あ、謝るからどうか嫌わないでもらいたい」

「俺が？嫌いに？」

「あ、ああ」

「なるわけないだろ？ステラもソフィーもリュックもみんな俺の大切な仲間なんだから」

「そうか！でも仲間ではなくジンの大切な人になりたいのだが・・・」

「なっ！？」

ステラのいきなりな発言に俺は驚いたものの、まだ寝ているソフィーとリュックを起こさないように小声で話を続けた。

「いきなり何を言ってんだよ！？俺には前にも話したとおり、彼女がいてだな・・・」

「それでも構わないのだ。私はそれでもジンの女になりたいのだ。それにジンがいた世界がどうだったかは知らないが、この世界では一夫多妻制だから本妻でなくとも側室としてでも私を愛してほしいのだ」

「ちょっと待ってくれ！話が急すぎて何が何だか・・・」

「私はもちろん、ソフィーをジンを好いている。だから、すぐに答えを求めるようなことはしない。ジンの事情も知っているからな。」

ソフィーと話合った結果がこれだから、考えてもらいたいだけだ」

「分かった」

「それでは私は鍛錬に行ってくださいよう」

「ああ」

俺はいきなり朝一でステラに告白された。

ステラは可愛い。それに俺のことを愛しているようだ。

だが、俺にはみちるといふ恋人がいる。それを知ってても、側室でもいいから愛してほしいと言ってきた。ソフィーも同じらしい。

「ソフィー、起きてるんだろ？」

「あら？バレてましたか」

「まあな。それよりソフィーもそうなのか？」

「はい。私もご主人様を愛しております」

「そうか・・・」

「ご主人様、難しく考える必要はありません。どのような結果でも私たちは受け止めますし、ご主人様の元からいなくなることはありませんから」

「ありがとうな」

「私はリュックちゃんを部屋に連れて行きますわ」

「ああ、頼む」

ソフィーはリュックを抱きかかえ、そのまま部屋を出て行った。

部屋に残された俺は考えていた。

どうするかを。

場所は変わり、アロアルド王国内にある闘技場。

現在、勇者であるみちるはここで日々修行の毎日である。

今日はエリーによる魔法修行の日である。

「みちる様、今日は魔法の修行日です。まずは魔力を練ることから始めましょう」

「うむ」

みちるは魔法修行の日は必ず魔力を練ることから始めている。

なぜなら、魔術として使う時には魔力を練ることでより高密度にした方が威力が上がるからだ。

みちるは精神を集中させて魔力を練り始めた。

それは初めて魔力を練り始めた時とは段違いに速さが上がっている。それに魔力も増えたようだった。

その時、聞きたいと思っても聞けなかった声が不意に聞こえてきた。

『みちる・・・聞こえるか?』

「ひゃい!？」

「みちる様? どうなさいましたか?」

「え? いや、今ジンの声が聞こえたんだが・・・」

「今ですか? 気のせいではありませんか? 周りにはおりませんし・・・」

「いや、でもそんなはずは・・・」

『みちる! 聞こえていたら返事をしてくれ!』

「やっぱり聞こえるではないか!」

「本当ですか!？」

「聞こえているぞ! ジン!」

『良かった。実は今念話をしているんだ』

「念話?」

「念話ですか!？」

「知ってるいるのか?」

「はい。ですが、普通は出来ないことでございます。なぜなら、念話というのは神級魔法の空間魔法ですから・・・」

「じゃあ、ジンが空間魔法を使ってるって言うことか?」

「はい。ですが、普通ならそれは不可能なのですが・・・」

「でもジンは使っている。ならば私は信じよう。念話ということならば、頭の中で念じていれば会話が出来るのだな?」

「はい」

「分かった」

『みちる、さっきから誰と話しているんだ？』

『今私は勇者の修行の最中でな。エリーに魔法を学んでいるところだったのだ』

『そうか。じゃあ、エリーに感謝しないとな』

『あとで伝えておこう。それよりもいきなりどうした？』

『ああ。実はな・・・』

俺は今ステラとソフィーとリュックという仲間と旅をしていること。そして、ステラとソフィーに好きだと言われたこと。

2人とも俺の事情を全て知っていることを話した。

『・・・ということなんだ』

『ふむ』

『俺はお前が好きだ、みちる。でも前の世界では俺は死んだ身でお前はまだ生きている身だ。魔王を倒してお前が戻る時に戻りたいのであれば、俺は・・・』

『誰が戻りたいと言った！私はお前のいない世界に興味はない！だから、お前がこっちの世界にいるのであれば、私も残る！』

『そうか！ありがとう！！・・・愛してるぞ、みちる。まだ勇者としての務めもあることだから、今すぐって訳にはいかないが、俺と結婚してくれ』

『もちろんだ！私もジンと結婚したいと思っていた』

『即答だな・・・。ちょっとは考えると思ってたんだが・・・』

『何を今更。私はジンのことが小さい頃から好きだからな。いや、愛している。だから恋人になったのだし、ゆくゆくは結婚したいとも思っていたのだ』

『ありがとう。素直に嬉しいよ』

『ところで、先ほどの者たちのことだが・・・』

『そうだな。分かってる。みちると結婚するわけだから、断ってこ

なくちゃな』

『何を言っている？』

『は？いや、だって結婚してくれるんだろ？』

『もちろん、私はジンと結婚して妻になる。だからと言ってあの者たちを振るのはお門違いだ。そこまで私のことを本気で愛してくれていると受け取るがな』

『だったら尚更・・・』

『だから、私が本妻で、その者たちには側室になってももらえればよからう！』

『いいのかよ？』

『もちろんだとも。この国が一夫多妻制だと言うのは前にエリーに教えてもらった。ならば、ジンのことを本気で愛している者は無碍には出来ない。私はジンがカッコよく、優しいというのを誰よりも良く分かっている。だから女性に人気なのも知っている。前の世界ならば許さないが、この世界は一夫多妻制なのだ。だから、多くの女性に愛されることは誇らしい事だと私は思うぞ』

『じゃあ、良いのか？』

『だから、始めからそう言っているじゃないか。それにジンも心の底では実は好きになっていたのではないか？』

『まあ、2人とも俺のこと本気で好きになってくれたからな。その場で断れなかったのは、みちるのことを愛していながらも、2人どこか惹かれるところがあっただと思う』

『私はジンが連れてくる者には何も言わん。ジンを信じているからな』

『みちるは良い奥さんになるよ』

『そうだろう。ジンの為に花嫁修行をしてきたからな』

『嬉しい限りだな』

『いつまでも話していたいが、私も修行の身でな。今度の大会に出るまでに力を付けなくてはならないのだ』

『大会って今度行われる武闘大会のことか？』

『ああ。そうだが？』

『その大会な、俺たちも出るんだよ』

『そうだったのか！ならばそこで紹介をしてもらおう』

『分かった。でもまだ修行をしてて大丈夫なのか？』

『まあ、明日出発してそっちに着くのは前日か当日になるようだな』

『そうか。じゃあ、またこっちから連絡するな』

『ああ。待ってるぞ』

また場所は変わりジンの元へ

俺はみちるとの念話を終え、ステラとソフィーを部屋に呼んだ。

「あれから色々と考えたし、念話を使ってみちるにも相談をした」

2人は黙って俺の言うことを一言一句逃すまいと聞いてくれている。

「そして、答えは出た」

ソフィーとステラは顔を強張らせて俺の口からどちらの答えが出て
もいいように準備をしている。

「俺はみちるのが好きだ。愛している。だからみちるにプロポ
ーズをして結婚をした」

それを聞くと、2人はガツクリと肩を落とし、顔を俯かせて床に雫
が垂れていた。

おそらく涙だろう。

でも、俺は言葉を続けた。

「それと同じぐらい、ステラとソフィーが好きだ！だから、俺でよければ結婚しよう」

2人は「はっ？」と顔を上げて俺を見ている。

「もう一度言うけど、側室になっちゃうんだけど俺と結婚してくれるかな？」

ステラは再び俯いてしまった。

それに対してソフィーは声を上げて泣いてしまった。

「ほ、本当に・・・結婚してくれるのですか？」

「ああ。もちろんだ」

「うわああああああああん！」

「よしよし。何も泣くことはないだろう」

「だって、だってご主人様があああ」

ちよっともったいぶったかな？

「不安にさせちゃってごめんな」

そう言ってソフィーの頭を撫でてあげながら抱き締める。

「ジン・・・」

「ステラ？ん？んうう！」

ステラはいきなり俺の前に来たかと思うと、キスをしてきた。それも大人のキスだ。

ファーストキスはみちるだったが、大人のキスはステラが初めてだった。

「ぷはっ！・・・ステラ？いきなりどうした？」

「ジンが好きだから・・・。今まで我慢してきたから・・・」

「そうか・・・。ごめんな、我慢させてしまった」

「いや、いいんだ。だってこんなに幸せな気持ちでいるのだから」

「そうか。俺も今とても幸せだ！」

俺はステラとソフィーを抱きしめ、ソフィーともキスをした。

初めての4人!?!でのクエスト(前書き)

昨日は1日サガフロンティアをしました。

最近はずっと懷ゲーをしています。

次はG・O・D Pureをしようかなと考えています。

この作品のキャラが安定しない！

初めての4人!?でのクエスト

昨日は3人で寝た。

寝たと言っても変なことはしていない!!

キスをして抱き締めたら2人は満足するようにして寝てしまったからだ。

残念そうだって?

な、何を言っているんだい?

あはははは。

俺たちは今、ギルドの受注掲示板の前でどのクエストにするか悩んでいる。

ソフィーのランクをすぐにあげる必要があるからだ。

しかし、だからといって高ランクのクエストにするとリュックが危ない。

リュックは俺たちがギルドに行くと知ると、自分も行きたいと駄々をこねて無理やりついてきたのだ。

「リュック、やっぱり待っててくれないか?」

「嫌だ! 僕もみんなと一緒に行く!!」

「リュックちゃん、もしかしたら死んじゃうかもしれないのよ?」

「大丈夫! 僕も少しは戦えるしいざとなったらお兄ちゃんが助けてくれるもん」

「俺はいつでも助けるが、でも本当に危ないんだぞ?」

「平気だってば!」

「ジン、ここはリュックを連れていった方がいいぞ」

「そうだな」

俺たちは諦めて再度受注掲示板とにらめっこを始めた。

「これなんてどうだ？」

ステラが手にしたそれは『消える魔獣の討伐』Bランクのクエストだった。

「面白そうだな。俺はこれで構わない」

「私も構いませんわ」

「僕もー！」

「じゃあ、これで登録してくるわね」

ステラは登録を終え、戻ってきた。

そして準備をして目的地に向けて出発した。

目的地はここから約3日のところにある村。

その村の近くの森に出てくる消える魔獣を討伐してほしいということであった。

3日もかけて馬車でのんびりしていたら大会に間に合わないのだから、ここでもバハムート先生にお願いをして村まで飛んでもらった。

村に着き、村長と話をしてさっそく討伐へと向かう。

「リュック、俺から離れるなよ？」

「うん・・・」

リュックもまだ子どもなのだ。

怖いだろう。

「ソフィー、何か感じるか？」

「いいえ。何にも感じませんわ」

2人の方はもう戦闘準備万端といった感じで周囲に気を張り巡らせている。

消える魔獣とはどういう魔獣なのだろうか？

そんなことを考えている時、背後に気配を感じた。

しかし、後ろを振り返っても何もいなかった。

2人も同じで振り向いていたただ納得いかない顔で再度周囲に注意をしている。

リュックに関しては俺の腕をものすごい力で握ってくるものだから、とても痛い。

俺たちは再び歩き出し、森の中の開けた場所に出た。

そこは森に恵みをもたらす湖であり、今でも動物が水を飲んで、魚が跳ねている。

その時、対岸から獣の唸り声が響き渡り、さっきまで水を飲んでいった動物たちはみんな逃げていった。

「なんだったんだ？今の声は」

「お兄ちゃん・・・」

「大丈夫だ。俺が守ってやるから」

リュックが泣きそうになっていたので、頭を撫でながら笑顔を見せるとリュックも笑顔になり抱きついてきた。癒されるなあ。

「リュックちゃん、策士だわね」

「なんと羨ましい事を・・・」

子ども相手に嫉妬しなくても・・・。

なんてkとを考えながら、声のした方へ歩を進めると、そこには大きな体躯の狼がこちらを威嚇しながら立っていた。

「なんとも大きい狼だな」

「でもこれがあの消える魔獣なのでしょいか？」

「どちらにしろ、戦いは避けられそうにないな」

俺はリュックを守りながら後衛に回り、魔法を打つ。

ソフィーは弓を放ちながら一定の距離を保つ。

ステラは弓矢や魔法に十分注意をしながら斬りつける。

しかし、狼はその大きな体躯を消し、その場から消えた。

「なっ!？」

「どこに!？」

「消えただと!？」

狼は俺の後ろに回り、姿を現して噛みつこうとした。

俺はそれを避けてステラやソフィーのいるところまで移動した。

すると狼はまた消えてステラの横に現れ、また噛みつこうとした。

「ん？」

俺は狼の行動におかしなところを見つけた。

「ステラ！」

「どうした？」

「奴は攻撃する時はどうやら姿を現すみたいだ」

「なるほど。だったらそこを狙えばいいのだな？」

「そうだ！ソフィーもいいか？」

「分かりました」

狼が再び姿を消し、今度ソフィーの後ろから前足で薙ぎ払おうとしたが、ステラが前足に一閃！

グアアアアア！！

狼は痛みから叫んだ。

そこにソフィーが水の魔法で作りだした無数の水の弓矢を放ち、狼に突き刺さる。

グガアアアアア！！

狼はあまりの痛みにもた叫んだが、まだ立ち上がろうとしている。

そこに俺が最後の一閃！

狼は息絶えた。

それを闇で倉庫に入れ、村へと移動し、村長に全て話してまた街へと戻った。

「それではこちらが今回の報酬です」

報酬はクエスト達成として銀貨10枚を受け取り、素材はそのまま鍛冶屋へと持って行く。

狼はミステリックワウルフと呼ばれているBランクの魔獣であった。

ソフィーは今回のクエストでランクがDに上がった。

素材を鍛冶屋に持って行き、ソフィーの弓を強化してもらうよう頼んだ。

後日取りに行くと、ソフィーの弓には魔力強化が施されており、更には風魔法強化がついた。

普段携帯している際に弓を消えたように見せることも出来るのだとか。ただ、やはり攻撃の時には弓が現れてしまう。一見使えそうだが、あまり使えないのかもしれない……。つけておいて損は無いと思うが。

その日の夜は全員で祝杯を上げ、夜遅くまで飲んでいた。
大会まで、あと5日。

大会当日（前書き）

登場人物が多くなってきたので頭がごちゃごちゃしています。
短いですが読んで下さい。

大会当日

大会を翌日に控えた日。

ソフィーのランクがBランクに上がると、大会のエントリーシートの更新を行う為にギルドへと急いだ。

更新をするとともにリュックを預かってもらえるように頼んだ。

「それにしても間に合ってよかったな」

「ありがとうございます」

「これで3人で出ることが決まったが、これからどうするのだ？」

すると後ろからよく知った声が聞こえてきた。

「ジン！！」

「「「え！？」」」

「久しぶりだな！」

「みちる！久しぶりだな！！」

「今着いたところなのだが、着いて早々ジンに会えるとは思ってなかったな」

「そうなのか。俺達も今エントリーシートを提出したところなんだ」

「そうかそうか。ところでそちらの方は？」

「ああ、ごめん。この前話したと思うけど・・・」

俺はみちるに仲間になった3人を紹介した。

そして、ステラとソフィーと婚約を交わしたことを話した。

「みちる、お前の方は何人で出るんだ？」

「私の方は4人だ」

「そうか」

「まずは魔術師のエリー・アロアルド。ジンはもう知ってるな。私の魔法の先生だ。そしてこちらが剣士のガルマ・クラウス。私の剣術の先生です。彼は個人戦にも参加します。そして最後が魔剣士のシャリー・ガナバ。彼女も個人戦に参加する。」

「こちらの3人は先ほど自己紹介したが、俺はジン・キリマだ。よろしく頼む。ちなみに俺も個人戦に出るから良い試合をしよう」

「ジンさん、お久しぶりです」

「そうだな。みちるのことありがとうな」

「いえ、勇者様にお使いするのが私の役目ですので」

「そうか。みちる、ちょっと話があるんだが、いいか？」

俺はみちると2人っきりになれるように場所を移動し、あらかじめ買っておいた指輪を渡した。

作るよりも買って渡した方がいいと思ってさ。

「みちる、念話で俺の気持ちを伝えたけど、改めて言わせてもらいたい。俺はみちるを昔から好きだった。そして恋人になったが、前みたいな想いをするのは嫌だ。だから俺と結婚をしてもらいたい」

「はい。よろこんで!!」

俺は改めてみちるにプロポーズをして指輪をみちるの薬指にはめた。戻るとほぼ全員にからかわれたが、もう隠すこともないので正直に伝えると、みんなが祝ってくれた。

もちろん、ステラとソフィーの分も一緒に祝ってくれた。

その日は夜遅くまで飲み明かした。

そして、大会当日。

この日は長い1日となることをジン一行に勇者一行はまだ知る由もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919s/>

異世界忍者

2011年5月6日01時03分発行